子どもたちを送る日、それは保育を振り返る日

河邉貴子

子どもと園生活を共にしたことがある人ならば、そして、その子どもたちを小学校へ送り出す経験を一回でもしたことがあるならば、「子どもたちを送る日」の一節に対して、共感と深い反省の念を抱くことだろう。本稿では、これを契機に私自身の保育記録をひも解き、修了間際の子どもと保育者の関係を見つめ直してみたい。

担任として子どもたちを送る

人は一生の間に何枚の「卒業証書」の類を手にするのだろうか。少なくとも二枚、多ければ五、六枚だろうか。それはいわば、「住み慣れた世界」から、「新しい世界」へのパスポート。心の中では不安と期待が交錯しながらも、「将来」に向けて強く輝く瞬間でもある。

中でも幼稚園・保育所を修了する時にもらう「修了証書」は特別な一枚に違いない。なぜならば、家庭から社会へと第一歩を踏み出した子どもたちが、人生で初めて手にする証書だからである。

かつて保育者だった私は、五歳児の担任を六回経

験した。修了証書授与の際、子どもの名前を読み上げるのは担任の役目である。「声が震えてはならない」と涙があふれるのを堪えるので、修了式の日はいつものどの奥が痛くなったものだった。「お母さんから離れられなかった○○ちゃんが、こんなに立派になって」と、共に暮らしてきた日々が頭をよぎり、あるいは「私のかかわりは適切だったろうか」との思いが込み上げる。すっくと園長の前に立っているその自立的な姿を見ると、もう涙がこらえ切れない。

園長として子どもたちを送る

その後、何年か後に私は導かれて短期大学の教員になり、幸運なことに附属幼稚園の園長を兼務して七回の修了式を執り行わせていただいた。修了に当たっての園長の大役は、彼らに修了証書を渡すことだ。私たちは一生のうちに何枚もの証書を手にするが、幼児にとっては生涯初めての体験である。見たことも触ったこともない証書という一枚の紙の意味をどう認識しているのだろう。

「修了式って何をする日?」と尋ねてみたところ、「幼稚園とお別れする日」「ありがとうを言う日」などと口々に答える。そして一人が「園長先生から修了証書をもらう日」と言った。「それじゃあ修了証書って何?」と聞く。「大切なもの」とは答えるが、それがなぜ大切なのかはわからない。そこで見本を見せて、「これが修了証書。みんなは幼稚園で

いっぱい遊んで、友達を大切にすることとか、自分で考えることとか、大切なことをしっかりできるようになったから、もう幼稚園はいいですよ、今度は小学生になってくださいという証明書」と説明した。子どもの顔はキラキラと輝いていた。しかしその後、A子がそっと近づいてきてこう言った。

「私、もらいたいような、もらいたくないような気持ちがしてる……」

生まれてからたった五、六年でこんなに豊かな感情の襞をもつようになることに驚く。幼稚園（あるいは保育所）という初めての実社会で、子どもは親から離れ、自分の力で「自分の世界」を築く。「修了証書をもらいたいけどもらいたくない」という気持ちこそ「自分の世界」を築いた証明なのだと思う。

修了間際の目覚ましい「育ち」

修了間際の子どもの育ちには目をみはるものがある。私が担任をしていた園では、修了式前の最後の行事として、ささやかな音楽会を開くことになっていた。幾つかのグループに分かれ、自分たちで演奏する楽曲を決めて保護者に披露する。子どもたちは、私が声をかけなくても自分たちで集まって練習をし、練習が終わると「お待たせ」と言いながら仲間の遊びに戻っていく。その姿は実に主体的で、行事として課せられているから取り組むというのではないことがわかる。彼らは近くに迫っている「お別れ」を意識し、心を寄せて一つの方向に向かうことに喜びを感じているのである。ちょうどそのころの保育記録を読み返してみると、次のように書いてある。

○二月十四日

ちょっと声をかけただけでグループごとに練習にくる。「練習場」と子どもたちが呼んでいるス

テージは一か所なので、自分たちが終わると園庭のドッジボールに戻っていき、「次のグループどうぞ」などと交代し、自分たちで進めている。（中略）自分たちのやることが終わると音楽会の看板作りの手伝いに来たり、友達の練習を見てあげたりしている。二年に一度味わう（二年保育・五歳児）子どもの大きな成長を目の当たりにした時の大きな感激。この想いをするといつも修了なのだ。

この情景を支えているのは何か。それが「育ち」というものである。「育ち」は目には見えないし、測定することもできない。しかし確実に園生活を通して一人ひとりが育ったという事実が、自律的な生活を生む。

いま、自分は何をしたいのか、何をするべきなのかがわかって行動できるようになり、しかも集団として支え合える姿である。ここまで育てば、充分に幼児教育の役割を果たしたといえるのではないか。子どもたちの様子を見ながら、ほっと息をつく。

この音楽会のすぐ後に、翌春入園する子どもの一日体験入園が計画されており、年長組が何か歓迎の出し物をすることになっていた。私は修了式の練習を控えて忙しくなることだし、音楽会でやった曲でも聴かせたらどうかと安易に考えていた。ところが子どもたちの猛反発に遭ったのである。

○二月二十二日

新入園児のためにお店やさんを開きたいといったのはK男である。私の計画（音楽会の歌を歌おう）とどちらがよいか、みんなに図ったところ、子どもたちは全員K男の意見を選択した。同じことは繰り返したくないというのである。学級全体の目指す方向を、先生に言われたからでなく

自分たちで決めて取り組みたいという気持ちの表れを見たように思う。

こうなると、もう「脱帽」である。

義務教育年齢引き下げ論議がたびたび起きる。賛成論者は根拠として幼児の発達が近年早まっていることを挙げる。しかし、私は五歳児は幼児教育を受けているからこそ、しっかり育つのだと思う。五歳児が幼児教育施設にいる意味を考えて議論を進めるべきなのではないか。

心の襞がこんなに細やかになり友達と心情を分かち合える五歳、ある程度の見通しをもって自立的な生活を送れるようになる五歳。そんな彼らが所属する集団の最高学年にいるからこそ、その力は飛躍的に伸びる。

翌月には一年生になって、すっかり「赤ちゃん返り」したように幼く見える彼らだが、心と体に満々と「育ち」を蓄えて修了していくからこそ、新しい世界に喜んで飛び込んでいけるのであろう。

子どもとの関係を振り返る

修了間際は、子どもたちのこのような大きな成長を前にして、保育者としての自分のありようを振り返る時でもある。

子どもはいつでも大人に対して寛容で、**「私の足りないことを、あなたはなんとも思ったりしていない」**ことはわかる。けれども、次に新たな子どもたちとの出会いが待っているからこそ、修了していく子どもたちとの生活を省察しておく必要があるだろう。子どもとの生活は、楽しくなければならないが、楽しければそれでよし、というわけにはいかない。

以下は五歳児を担任していたある年の二月の記録である。

○三月十日―子どもたちを修了させるに当たって

「保育が楽しい」と感じた一年間だったが、「楽しい」と感じている裏に落とし穴はないか。「こう育ってほしい」という強い願いをもち、それを子どもに押しつける時、子どもが思う通りにならない苦しさを感じる。この苦しさを感じなかったということは、

・全体的には子どもの興味欲求に沿った保育が展開できたのか

・子どもとのズレを感知しきれなかったのか

・ズレを感じながらもうまく私の意図する方向へ保育を展開していたのか

のいずれかである。保育歴が長くなると大きな失敗をしなくなる。反面、うまく保育をしているのではないかと不安になる。現在、修了間際にして、それぞれが主体的に遊びに取り組んでいるが、遊びの楽しみ方をもっともっと深めてやれたのではないかと思っている。（後略）

子どもの心もちに寄り添い、自然体で子どもとの生活を楽しめる「先生」になりたいものだ。それはすべての保育者の願いだろう。自分の意図する方へ子どもをうまくまとめていく技術をもつのが「いい先生」ではないし、それが「教育」ではない。けれども、子どもとの生活を省察なくして楽しむのも「いい先生」ではない。保育者とはつくづく「因果な職業」だ。これでよいという到達点はない。いつも「これでよいか、これでよいか」と子どもとの関係を振り返って考え続ける。そこに保育者としての成長があると信じて。

子どもたちが飛び立つ三月。そのまばゆいばかりの育ちを前にして、自分の保育をじっくりと振り返る季節、それも三月である。

（聖心女子大学准教授）